

新学社文庫

十五少年^{ひょうりゅう}漂流^き記

ヴェルヌ 著
石川 湧 訳

SHINGAKU-SHA

新学社文庫発刊のことば

人生の大きいよろこびの一つは、ことばと文字をもち、読み書きのすべてを伝授されたことにある。これあるがゆえに人は、ひとりひとりの寿命こそ短い、祖先から子孫に通じて文化の継承という永遠の発展性をもち、宇宙の秘められた調和と法則をも解明することができ、また個人の生涯においても、人は読書により古今の賢者を師として、はるか数千年の歴史をさかのぼり、また広く東西の知識を学ぶことができるが、読書を外にしては祖先がのこしてくれた文学上の大いなる財宝や、真実な朋友、親切な忠告者、愉快な伴侶を得ることがむずかしいであろう。良書は何をおいても読むべきである。弊社はここに新学社文庫を発刊するにあたり、多感にして吸収力に富む若き日にぜひ一読すべき良書を精選して広く若人にすすめ、愛読をこいねがう。

昭和四十三年五月

奥西保

監修 武者小路實篤 麻生磯次 三輪知雄

十五少年漂流記

新学社文庫

昭和43年9月1日 発行



著者 ヴェルヌ

発行者 奥西保

印刷者 船先悦収

東京都文京区本郷3丁目
16の4 振替 東京 97860 株式会社 新学社教友館
京都市東山区山科東野井上
町48の6 振替 京都 7017

落丁・乱丁本はお取替いたします

天理時報社印刷 A

新学社文庫

十五少年漂流記

ヴェルヌ 著
石川 湧 訳



新 学 社

贈

呈

伊万里市日中友好協會

たのしき世界選手

ジュール・ヴェルヌの作品は、すこしも時代おくれになっていない。それは、わたしたちを、常に、友愛と正義と幸福との道を進むようにとはげますがゆえに、本質的に若々しいのである。ところで、ジュール・ヴェルヌは、よい先生、考えることの先生でもあり、書くことの先生でもある。彼は、人々が偉大な著作家について語るときに忘れがちな長所、すなわち、職業的良心、仕事熱心、用心深さ、有用な気むずかしさを持っていた。

もちろん彼は、ヴィクトル・ユゴーでもなければ、マクシム・ゴーリキーでもない。彼はあくまでもジュール・ヴェルヌであり、彼なりに世界選手であり、いつもにこやかで、かざり気なく、がっしりした、彼なりの世界選手なのであり、たのしい夜ふかしと、たのしい旅行との供給者なのである。

ピエール・ガマラ
(フランス・作家)

目次

たのしさの世界選手

ピエール・ガマラ

三

十五少年漂流記

第一部

九

第二部

二七

チエアマン島地図

二六

解説

ヴェルヌの人と作品

石川 湧

二六

読書のしかた

小寺政太郎

三〇

——十五少年漂流記の読解と鑑賞

年譜

三二

原文は、新かなづかいに改めたほか、現代表記法にもとづき、現行国語教科書を標準として漢字を削減した。各作品とも冒頭部分のふりがなをふやし、文章中の難解語句・事項については見開き二ページ単位を原則として傍注を加えた。

(編集部)

装丁 棟方 志功

扉板画 棟方 志功

さしえ 原書より

十五少年漂流記



あらし 嵐。——一隻のスクーターが難船した。
 十五人の少年はスラウギ号上にとり残された。
 ばらばらになった前牆——船室に駆けこむ——
 半ば息もつまるほどの白い泡——。

第一部

一

一八六〇年三月九日の夜、海におおいかぶさった雲のために、数メートル先は、何も見えなかった。

波がしらが、鉛色に光りながらくだけている。この荒れくるう海の上を、帆をほとんどたんだ一そうの船が漂っていた。

それは、百トンのヨット——イギリスやアメリカでスクーナーという帆船である。

このスクーナーは、スラウギ号という名まえだったが、船尾の名まえ札を見ても、読めない。波にさらわれたか、衝突でもしたのか、下半分がちぎれていた。

夜の十一時だった。このあたりでは、三月の初めは、まだ夜が短い。夜明けの光は、朝の五時ごろにしか見えない。しかし、太陽がのぼっても、スラウギ号をおそっている危険は、少な

くなるだろうか？ この弱々しい船は、やっぱり波のまにまに、漂うのではなからうか？ それにちがいない。波がおさまりあらしがやむことだけが、これをおそろしい難船から救うことができるのだ——陸の上でなら助かるだろうに、どこにも陸地の見えない、大海のまんなかでの難船だから！

スラウギ号の船尾には、四人の少年が舵をとっていた。ひとりは十四歳、ふたりは十三歳、もうひとりは、十二くらいの黒人の見習い水夫だった。かれらは力をあわせて、ヨットがたおれそうになるのを、防いでいた。つらいしごとだ。いくらやっても、舵は逆もどりして、かれらをはねとばしそうにする。それどころか、十二時近くには大波が船腹にぶつかって、舵をもぎ取られないですんだのは、奇跡的だった。

少年たちは、その打撃で横だおしになったが、すぐに起き上がった。

「舵はいいかい、ブリアン？」と、ひとりがたずねた。

「だいじょうぶだよ、ゴードン」と、ブリアンはもとの場所にもどり、おちついた声で答えた。それから、三番めの少年に向かって、「しっかりしろ、ドニファン、元気をなくすな！……ほかにも助けなくちゃならぬ人たちがいるんだぞ！」

こういうことばは、英語で言われたのだが、ブリアンの調子には、フランス人らしいなまりがあった。

かれは、見習い水夫のほうを振り向いて「けがをしなかったかい、モコ？」

「いや、ブリアンさん」と、見習い水夫が答えた。「船が傾^{かたむ}かないようにしないと、沈没^{しめつ}しますよ！」

そのとき、船室に通じる階段の戸が、急に開いた。小さい頭が二つ、甲板^{かんばん}の高さに現われ、同時に、犬の顔も見えてはえる声が聞こえた。

「ブリアン？ ブリアン？……」と、九歳の子どもが叫んだ。「どうしたの？」

「どうもしないよ、アイヴァースン、どうもしない！」と、ブリアンが答えた。「ドールといっしょに部屋^{へや}へ降りたまえ……早く！」

「でも、こわいよ」と、もっと小さい二番めの子どもが言った。

「ほかの人たちは？」と、ドニファンがたずねた。

「ほかの人も！」と、ドールが答えた。

「さあ、みんな帰って！」と、ブリアンが答えた。「中にはいつて、毛布をかぶり、目をつぶるんだ。そうすれば、こわくないよ！ 心配ないんだよ！」

「気をつけて！……また大波だ！」と、モコが叫んだ。

①二本マストで、三角帆の、五十トンないし二百トンの西洋形帆船。十八世紀、十九世紀におもに漁船として使われた。

ものすごい波がヨットの船尾にぶつかった。こんどは、さいわいにも、水がはいってこない。もし、階段の昇降口から水がはいったら、ヨットは重くなって、波の下になってしまったらう。

「はいれったら!」と、ゴードンがどなった。「はいらないと……かんべんしないよ!」

「さあ、はいるんだよ、坊やたち!」と、ブリアンが、やさしい調子でつけたした。

ふたりの頭が見えなくなったとき、昇降口に出てきたもうひとりの少年が、こう言った。

「ぼくらは手つだわなくてもいいの、ブリアン?」

「いいよ、バクスター!」と、ブリアンが答えた。「クロッス、ウェップ、サーヴィス、ウィルコックス、それからきみは、子どもらといっしょにいてくれ! ぼくら四人で、たくさんだ!」バクスターが、内側から戸をしめた。

「ほかの者もこわいんだ!」と、ドールが言ったつけ。

それじゃ、あらしに漂う、このスクーターには、子どもしかいないのか?——そうだ、子どもばかりだ!——それで、何人いるのだ?——十五人、ゴードン、ブリアン、ドニファン、見習い水夫を入れて。——どうしてかれらは船に乗ったのだ?——それは、あとでわかる。

このヨットには、おとなはひとりもないのか? 船長も? 船を動かす船員も? このあらしの中で舵をとる舵手も? いないのだ! たったひとりも!

それだから、スラウギ号が大海の中のどの地点にいるのか、この船のだれも言うことができ

なかったらう！……どんな大海か？ 大海のうちの、いちばん広い海！ オーストラリアやニュージールランドの陸地から、南アメリカの海岸まで、二千マイルにわたってひろがっている、この太平洋。

「いったい、どうしたのだ？ このスクーナーの乗組員たちは、何かの災害で、行方不明にでもなったのか？ マレーの海賊にでもさらわれて、いちばん年上でもやっと十四にしかならない、少年乗客だけが残ったのか？ 百トンのヨットなら、少なくとも船長ひとり、士官ひとり、船員五、六人は必要だ。ところが、操縦に必要なこの人員のうち見習い水夫ひとりしか残っていない！……いったい、このスクーナーは、どこから来たのだ？ オーストラリアの海岸か、それとも大洋州のどこかの群島からか？ また、いつから、そして、どこへ行くつもりで？ こんな遠い海でスラウギ号に出会ったら、どんな船長だって、こういう質問をしたことだろうが、それに対して、この少年たちは、おそらく答えることができなかっただろう。しかしオセアニアの海を行きかう太平洋航路の船も、ヨーロッパやアメリカから、何百となく太平洋の港に送る汽船や、帆船も、ひとつとして見えなかった。そして、機械や帆のがっしりしたそういう船が、このあたりにいたとしても、あらしを相手に奮闘しなくてはならないから、板ぎれのように海に漂っているこのヨットを救うことは、できなかったらう！」

けれども、ブリアンとその仲間たちは、スクーナーが左へも右へも傾かないように、最善を

つくしていた。

「どうしよう！……」とドニファンが言った。

「できるだけのことをするのさ！」と、ブリアンが答えた。

この少年はこう言った。どんな元気なおとなだって、ほとんど希望をなくしたことだろうに！

実際、あらしはいよいよひどくなった。風は、船員のことばで言えば、かみなりみたいに、吹いていた。そして、この言いかたは、まったく正しいのだ。なにしろ、スラウギ号は、あらしの打撃で「雷撃」^{らいげき}されそうだったのだから。それに、^⑤メインマストは、四十八時間まえから下から四フィートのところで折れていて、大帆^{おおほ}をつけることができない。帆がつけられたらもっとうまく操縦できたろうに。^⑥フォーマストは、てっぺんが折れただけで、まだだいじょうぶだった。しかし、ささえ綱がゆるんでしまつて、いつ甲板^{甲板}にたおれるかれない。へさきでは、ぼろぼろになった三角帆が、まるで鉄砲のように、音をたてていた。帆と言え、残っているのは、破れそうになつてゐる前帆だけである。少年たちには、帆をちぢめる力がないからだ。もし破れでもしたら、スクーナーはもう風の中で立っていることができないだろう。波をかぶってひっくりかえり、沈んでしまふだろう。そして、乗っている少年たちも、船といっしょに海の底に消えてしまふだろう。

そのときまで、沖には島ひとつ見えなかったし、東のほうに大陸の影も現われなかった！

海岸にぶつかったら、おそろしいことだが、それでも、この少年たちは、こんな広い海のあらしほどは、おそれなかったことだろう。浅瀬や、岩かどや、押し寄せる大波や、岩をくだく波の打ち返しなどのある、どんな海岸でさえも、見つかりさえすれば、自分たちは助かる、とかれらは考えていた。それは、大海ではなくて、自分たちの足を乗せてくれる、しっかりと大地だろう！

だから、かれらは、何か灯を見つけて、そのほうへ船を進めようと思っていた……

しかし、このまっ暗やみの中には、何のあかりも見えなかった！

突然、朝の一時ごろ、あらしの音よりも高く、何かの折れるおそろしい物音が聞こえた。

「フォーマストが折れた！」と、ドニファンが叫んだ。

「いや！」と、見習い水夫が答えた。「帆が帆綱からはなれたんです！」

「ほっとけよ」と、ブリアンが言った。「ゴードンは、ドニファンといっしょに、舵かじを守れ。

それから、きみ、モコは、ぼくに手つだってくれ！」

モコは、見習い水夫だったから、いくらか航海の知識を持っていたにちがいないが、ブリアンだって、全然それがないわけではなかった。ヨーロッパから大洋州に来た時、大西洋と太平

①船の中央部にある最も大きいほばしら。主橋しゅしりょう。

②船首の方にあるほばしら。前橋ぜんしりょう。